



# 漢字の形と意味、 その奥深さに分け入る

シュミツ・クリストフさん  
Dr. Christoph Schmitz

Another Eye

# 漢

字の形と意味の関係を知りたい」と欲し、自学自習をモットーに漢字研究を続けた青年がドイツにいた。日本思想史・哲学史研究者のシュミツ・クリストフさんだ。やがて彼は、不世出の漢文学者、白川静氏の知遇を得、白川氏が中・高校生以上に向けて平易に書き下ろした常用漢字の基本字典『常用字解』の英訳に挑んだ。シュミツさんはいかにして漢字の奥深さに気づき、形と意味の世界に分け入り、漢字学の巨人と出会ったのか。そして白川文字学の研究から得たものは何か。

## 漢字の形と意味の関係を知りたい

「ドイツに住んでいた頃にいろんな方面から日本に興味を持つようになりました。私が生まれた古都ケルンは伝統のある町で、そこに禪の道場もあり、行ったことがあります。禪は沈黙を守る不立文字の静かな世界で、瞑想が大切です。振り返ってみれば、私はそこに欠けている要素を後で補おうとしたのかもしれない。禅だけでは日本文化は理解できなかったということです」

日本に移住して6年目。流暢な日本語を話すシュミツさんは、日本思想史・哲学史の研究者であり、故白川静氏が築いた白川文字学の研究者である。

シュミツさんはドイツの大学で歴史と哲学を学んだ。やがて漢字に興味を抱くようになり、日本語と中国語を学び、漢字をテーマとした自由研究に挑んだ。

「研究の際にいろんな先生に会って、『この漢字の形と意味の関係はいったい何ですか?』と聞きました。でも、誰もきちんと答えてくれなかった。先生がそれを説明できないことに、まず疑問を覚えました。学生を威圧する大学の雰囲気も嫌でした」

哲学を学んでいたシュミツさんは、真理探究の一環として、漢字の形と意味の関係を謎を解きたいと思うようになる。しかし、同時にドイツの大学では漢字の本質は学べない

と落胆もした。

「残念ながら漢字は、話題にもなりませんでした」

修士論文・博士論文は日本思想史にしあまねに挑み、高野長英、西周のほかに仏教を批判的に扱った富永仲基(※1)を取り上げた。

「私は彼の強い影響を受けたかもしれませんが。仏教の思想は、日本文化を理解するために非常に大事です。日本には儒教の伝統もあり、儒教の伝統を研究したことで漢字の知識が増えました」

そして1997年のある日、朝日新聞にその後の人生を大きく転換させる記事を見つけた。

「白川静先生の字書『字通』(※2)の発刊にともない、先生がインタビューに応じた記事でした。このニュースを目にし、漢字の形と意味の関係がわかることを知り、早速『字通』を買いました。でも、当時はすぐには読めませんでした」

## 思想史の基礎を求め、白川文字学に傾倒

大学卒業後、ドイツの市民大学などで教えるながら、白川静氏の本を読み解き、研究を続けた。

「思想史の基礎になるものを漢字に求めたんです。でも、いろんな儒教思想家が抽象的な思想・倫理概念をこじつけようとしていることがわかりました。本来漢字は古代社会と結びついた、とても具体的なものなんです。そこで

## PROFILE

シュミツ・クリストフ  
Dr.Christoph Schmitz

白川文字学研究者、哲学思想史・日本思想史研究者。ドイツ・ケルン生まれ。ドイツと日本の大学で歴史と哲学、哲学史を基礎に日本思想史を学んでいる時に漢字に興味を覚え、漢字の研究を始める。1997年、日本の新聞に載った白川静氏の記事を読み、その活動を初めて知る。ドイツの市民大学などで哲学思想史と漢字を教えた後、白川氏訪問のため2001年来日。2002年、東大法学部に研究生として入学。2003年12月、白川静著『常用字解』の英訳を始める。現在出版準備中。東京都在住。

## COLUMN-1

### 白川静氏と白川文字学



2003年に恩師・白川静氏に再会した頃。撮影は津崎史さん。

### 白川静 しらかわしずか

1910(明治43)年、福井市生まれ。順化尋常小学校を卒業後、大阪に出て働きながら夜学に通う。中学校教師を経て立命館大学文学部教授となり、1981年に名誉教授の称号を受ける。中国最古の古代文字である甲骨文や金文を分析。従来の漢字解釈を覆し、「白川文字学」を確立した。字書三部作『字統』『字訓』『字通』(ともに平凡社)を完成させるなど精力的な研究活動を続け、1998年文化功労者として顕彰、2003年『常用字解』出版、2004年11月文化勲章が授与された。2006年10月30日、逝去。享年96歳。

※1 とみながなかもと。江戸時代の学者、思想家。合理主義の立場から儒教・仏教・神道を批判した。  
※2 親字の字数9500、熟語220000語、五十音配列。漢字の成り立ち、意味の展開、造語力を体系的に知ることのできる漢和辞典。『字統』『字訓』と合わせて白川字書三部作と呼ばれている。

## 白川文字学とは？

1900年もの間、漢字の聖典として扱われてきた『説文解字』（※3）の誤りを白川氏は指摘。中国にもない新しい漢字学の体系を打ち立てた。数万片の甲骨資料をトレースして書き写すという丹念な作業を通して、草創期の漢字の成り立ちにおける宗教的、呪術的背景を字形分析から明らかにし、中国の古代人の生活と意識にまで踏み込んだ独創的なその学説は「白川文字学」と称されている。



## BOOK

常用字解 平凡社 2,940円

常用漢字に絞って、そのもとの形から漢字の成り立ちを立証し、字形と意味との関係もやさしく正確に解説。よく使用される用例もあげて書き下ろした漢字の入門字典。シュミツさんが英訳に挑んだ一冊。



## WEB

立命館大学 白川静記念  
東洋文字文化研究所

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html>

シュミツ・クリストフさん  
Dr.Christoph Schmitz

Another Eye



牛骨に刻まれた甲骨文字。シュミツさん所有。

漢字の起源を調べていったのですが、部首を過大評価した解説は本当に正しいのか、と疑問を持ちました。白川先生の説と異なることが多かったからです。漢文の影響を受けた白川先生の日本語は、そう簡単ではなく、世界観を理解するのに少なくとも2年ほどかかりました。そして白川先生の偉業や字書を世界に紹介しなければいけないと思ったんです]

シュミツさんが指摘したのは、最古の部首別漢字字典『説文解字』（※3）での漢字の解釈と、白川文字学における漢字の解釈の差異である。

「たとえば『口』を使った漢字は多くありますが、『口』の意味が異なると、相当な量の漢字の解釈が変わってきます。『告げる』の『告』などがその例（※4）です。『口』が器を表わすことを白川先生はすでに50年前に紹介しています。ガリ版の手書きの論文集も公表されていました]

2001年、日本を訪れる機会を得たシュミツさんは「この機会に白川先生に会わなければいけない」と思い、手紙を出した。さっそく本人

から「思想史の研究の助けになるならこの上ないことだ」と歓迎する返事が届いた。

その夏、白川氏の京都の自宅を訪ね、初めて会った日のことを、シュミツさんは振り返る。

「白川先生はユーモアのある方で、とても楽に話げできました。私は思想史の研究から生まれたいろんな質問をぶつけました。漢字を教える方法も尋ねました。当時、私が行っていた漢字の紹介の仕方は、部首をガイドラインにしたものでした。白川先生から「意味のグループとして紹介したほうがよい」と意見をもらい、参考になりました。白川先生が甲骨文字の字形をすらすらと書いておられるのを拝見し、私は感動しました]

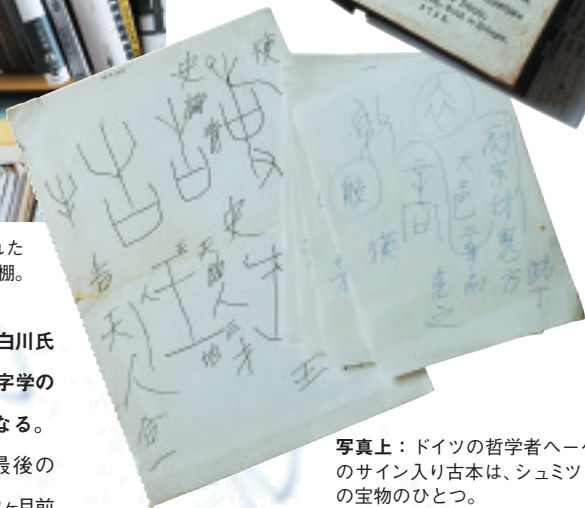
## 白川文字学研究者として英訳に挑む

シュミツさんは、白川氏の偉業を淀みなく語る。

「甲骨文字の字形を書くことは白川先生の文字学の基礎でもあります。トレーシングという方法を使いながら大量の甲骨片を写し、先生は直観力を鍛えたんです。約3200年前の古代人の意識形態に入るわけですから、

※3 紀元100年頃、後漢の儒学者・文字学者の許慎(きょしん)がそれまでの漢字を体系化し、まとめた最古の部首別漢字字典。成立当時、甲骨文字が知られていなかったために長く漢字の聖典として扱われてきた。甲骨文字が発見されたのは1899年。

※4 『説文解字』では、「告」は「牛は人を突くので、角に横木を取りつけて、それで人に何かを知らせたもの」と解釈する。しかし白川氏はその象形「告」を見て、「生」は櫛の枝葉、「口」の



ドイツから持参した立ち机で思索を続けるシュミツさん。都内の自宅にて。

英語、ドイツ語、日本語などで書かれた書籍や資料が並ぶシュミツさんの本棚。

すごい集中力とエネルギーが必要です」  
そして日本文化を掘り下げる。

「どうして白川先生が甲骨文字から漢字の意味を説明できるようになったのかを考えると、その基盤に日本文化があるのではないかと思います。禅的な直感を養う環境があり、形を大事にする文化があるからではないでしょうか。『形には必ず意味がある』という考え方が日本にはあり、形は現実の社会を写しているのです。漢字の形も偶然できたわけではないのです」

シュミツさんは白川文字学を学び、確かな手ごたえをつかんだ。

「以前は中国に行けば、漢字の本当の説明がどこかに記されているのではないかと考えていました。いろんな偽物に出合って、その都度真面目に受け止めたんですが、説明に整合性がなかったんです。白川文字学の理解には長くなりましたが、悩みは解決されたという満足感、確かな知識にまでたどりついたという充実感を覚えています。日常的な現象に照らし合わせて漢字の意味を説明できるようになったことがとても嬉しい」

シュミツさんは2003年、白川氏と再会した。そして白川文字学の深みに分け入ることになる。

「当時、白川先生は最後の字書『常用字解』を出す3ヶ月前でした。その原稿を見せていただきました。厚い原稿ですが、

その『常用字解』を英訳しようと思ったのです。白川先生の承諾を得、2003年末に『常用字解』が出版されたときに翻訳を始めました」

シュミツさんは「1年くらいでできると思っていたが、ほぼ3年がかかり、借金もかさみました」と苦笑いする。1200ページ分の翻訳は完成した。現在、海外での発刊に向けて準備中だ。

「立命館大学関係者から後日聞いた話ですが、私が英訳の話を持ち込んだことを白川先生はとても喜んでくださったそうです。明治生まれの方なので感情を露出されなかったのですが、私はとても嬉しく思いました。今は白川文字学の発展に続けて貢献できれば、と思っています」

シュミツさんは最後にある漢字を例に挙げ、自身と白川氏の関係に重ね合わせた。

写真上：ドイツの哲学者ヘーゲルのサイン入り古本は、シュミツさんの宝物のひとつ。  
写真下：シュミツさんが所有する白川静氏直筆の甲骨文字のメモ。

「ドイツ語に翻訳しきれない言葉のひとつに『恩師』があります。英語に翻訳するのも難しいくらいです。『恩師』という言葉が存在しているのは、東洋では先生と生徒の関係が大事にされているからなのでしょう。

白川先生と私の関係も特別だったのかもかもしれません。先生には弟子がたくさんいらっしゃいます。その中に西洋からやって来た一人の生徒がいた…。私は師に恵まれたと感謝しています」

漢字研究を通じた日本人の思想や生活習慣の理解。そして漢字学の巨人との邂逅。ドイツから来た白川文字学研究者は、大きな影響を受けた恩師の偉業を世界に発信すべく、さらなる高みへと向かっている。

Text by: 綾瀬良太

原形は「卣」で、祝詞（人が神に願い事をするために書いた文）をあげる時の供えの器を象徴したものと解いた。白川氏は「口」を「サイ」と名づけた。つまり、「告」とは「器に神の枝葉を掲げて神に訴え告げることを表わした文字」と説明できる。「口」を持った漢字の多くは、「くち」と解釈したのでは意味が通らず、白川説では「神事に関する事柄」と考え、その漢字の持つ意味が浮かび上がる。

◆今後「日本吉」ではシュミツさん監修のもと、「文字」というカテゴリーで漢字を紹介していきます。ご期待ください。

<http://nippon-kichi.jp/>